

平成28年度
広島市教育センター

小学校国語科第5学年「読むこと」の授業における 自己効力感を高めるための学習指導の工夫 —「自己調整学習方略ガイド」の開発を通して—

広島市立戸坂小学校教諭 大下 あすか

研究の要約

本研究は、小学校国語科第5学年「読むこと」の授業における自己効力感を高めるための学習指導の工夫について考察したものである。先行研究を基に、本研究では自己効力感を、「文章を読み、学習課題の達成に向けて『できる』という自信をもつこと」と定義した。伊藤(2007)は、学業上の目標の達成に向けて、自己調整学習方略が適用され、遂行レベルが向上すれば、自己効力感が高まるとしている。そこで、学習指導の工夫として、「自己調整学習方略ガイド」を開発し、その有効性を検証した。

その結果、児童の自己効力感が高まり、単元の学習終了後まで持続したことが示された。さらに、自己調整学習方略の選択・活用について具体的に振り返ることにより、自己効力感が高まることが示唆された。教師の支援においては、授業で「自己調整学習方略ガイド」を活用する際の留意点について整理することができた。

キーワード：自己効力感、「自己調整学習方略ガイド」、国語科「読むこと」

I 問題の所在

現行学習指導要領改訂においては、子どもの自信の欠如が課題の一つとして挙げられ、これまで取組が進められてきた。しかし、「中央教育審議会答申」（平成28年）においても、次期学習指導要領改訂に向け、学習・指導方法の改善について、子どもたちが「自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにすること」¹⁾を目指していると述べられており、課題は継続しているものと捉えることができる。

また、子どもの個性に応じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めていくためには、「一人一人の発達や成長をつなぐ視点で資質・能力を育成していくことが重要であり、学習内容を確実に身に付ける観点から、個に応じた指導を一層重視する必要がある。」²⁾とし、特に、授業が分からない子どもへの指導に当たっては、「自分にふさわしい学び方や学習方法を身に付け、主体的に学習を進められるようにすることが重要である。」³⁾と述べられている。

自己の実践においても、子どもが自信をもって、自分で学習を進めていけるような指導ができていたかを振り返ると、課題がある。子どもたちは、新しい文章に出会った時や、長文を読んで解答を記述する時などに、教師が指示をしたり、個別に支援をしたりすれば、文章を読み、学習課題に取り組むことができる。しかし、教師の指示や個別支援がない時には、子どもたちは、どのように学習していけばよいか分からないままになり、「自分でできそうだ。」という思いをもつことができるまでには至らなかった。そして、取り組む前から諦めてしまうという状況に対応しきれていなかった。

そこで本研究では、小学校国語科「読むこと」の授業において、子どもの自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにするとともに、自分にふさわしい学び方や学習方法を身に付け、主体的に学習を進められるよ

うにすることが肝要であると考え、そのための学習指導の工夫について探ることとした。

II 研究の目的

小学校国語科第5学年「読むこと」の授業において、児童の自己効力感を高めるための学習指導の工夫を探る。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究仮説の設定及び検証の視点
- 3 検証授業の計画と実施
- 4 検証授業の分析と考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 自己効力感について

伊藤(2007)は、自己効力感について、「『自分にはできる』というように自らの能力について確信をもつことで、人はやる気を高める。」⁴⁾「何かを学ぶ時に『自分にはできる』という自信をもつことはとても重要なことである。」⁵⁾と述べている。

このことから本研究における「自己効力感」を「文章を読み、学習課題の達成に向けて『できる』という自信をもつこと」と定義し、それを高めるための学習指導の工夫について研究を進める。

自己効力感が高まることについて、伊藤(2007)は、「学業上の目標の達成に向けて、自己調整学習方略が適用され、その結果として、遂行レベルが向上すれば、自己効力感が高まることになる。そして、その自己効力感が動機づけとなって、学習者は、さらに知識や技術の獲得

をめざして、自己調整学習方略を適用し続けようとするのである。」⁶⁾と述べている。そこで、本研究では、学習指導の工夫として自己調整学習方略の活用を取り入れることとする。

(2) 自己調整学習方略について

伊藤・神藤(2003)は、認知的側面の自己調整学習方略と動機づけ的側面の自己調整学習方略(「内発的調整方略」・「外発的調整方略」)を示し、自己効力感との関連を明らかにした。自己効力感が高いものほど、「認知的側面の自己調整学習方略」と「内発的調整方略」をよく用いるが、「外発的調整方略」は用いていないことが示された。逆に、「外発的調整方略」は、自己効力感が低くなるほど、使用されていることが明らかになった。

伊藤・神藤(2003)によると、認知的側面の自己調整学習方略と相関が高い順に、「一般的認知(理解・想起)方略」「復習・まとめ方略」「関係づけ方略」「リハーサル方略」であった。内発

的調整方略と相関が高い順に、「想像方略」「内容方略」「めりはり方略」「整理方略」「社会的方略」、外発的調整方略と相関が高い順に、「負担軽減方略」「報酬方略」であった。

以上を基に、伊藤・神藤(2003)が作成した自己調整学習方略と下位尺度⁷⁾を整理した(表1)。

(3) 自己調整学習方略の獲得を促す働きかけについて

伊藤(2009)は、「学校教育場面、特に小学校段階において、より自己調整的な学習方略の獲得を促す働きかけが求められ、また、その働きかけが有効でありうる可能性が示唆された。」⁸⁾

「確実な定着を図るためにも、授業や課題場面の学習方略支援の試みが必要だろう。」⁹⁾と述べている。支援については、「認知的側面と同時に動機づけ的側面にも働きかけを行う必要がある、特に内発的調整方略の使用を促すような支援が求められるといえる。」¹⁰⁾と述べている。

表1 自己調整学習方略の整理

認知的側面の自己調整学習方略	
一般的認知(理解・想起)方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ テストのための勉強をするとき、授業や本から手がかりを集めようとした。 ・ 宿題をするとき、きちんと問題に答えられるように、授業で先生が言ったことを思い出そうとした。 ・ 勉強をするとき、大事なむずかしい言葉を、自分の言葉におきかえた。 ・ たとえわからなくても、先生の言っていることをいつも理解しようとした。 ・ テストのための勉強をするとき、できるだけ多くのことを思い出そうとした。 	
復習・まとめ方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 勉強しているとき、習ったことを思い出せるよう、もう一度、ノートをまとめなおした。 ・ する必要がなくても、練習問題をした。 ・ 勉強する内容が退屈でももしろくなくても、終わりまでやり続けた。 ・ テストのための勉強をするとき、何度も何度も大切なことがらを思い浮かべて復習した。 ・ 理解できるように、それぞれ習ったことの要点をまとめた。 	
関係づけ方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 新しい課題をするのに、以前に学んだことを生かした。 ・ 何かを読んでいるとき、読んでいることと、自分がすでに知っていることを関係づけようとした。 	
リハーサル方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 読んでいるとき、一度、中断して、読んだことを繰り返してみた。 ・ 勉強内容を読むとき、おぼえられるように、くりかえし心の中で考えた。 	
動機づけ的側面の自己調整学習方略	
内発的調整方略	
想像方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 行きたい高校に受かった時のことを考える。 ・ 将来に自分自身のためになると考える。 ・ 前にテストなどでうまくいったことを思い出す。 ・ いやなことを考えないようにする。 	
内容方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のよく知っていることや興味のあることと関係づけて勉強する。 ・ 自分の生活上のことに関係づけて勉強する。 ・ ゴロあわせをしたり、歌にあわせたりしておぼえる。 	
めりはり方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 勉強するときは思いっきり勉強して、遊ぶときは思いっきり遊ぶ。 ・ 短時間に集中して勉強する。 ・ 「ここまではやるぞ」と量と時間を決めて勉強する。 	
整理方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 色のついたペンを使って、ノートをとったり、教科書に書きこみをする。 ・ ノートをきれいに、わかりやすくする。 ・ 部屋や机の上をかたづけて勉強する。 ・ ノートに絵やイラストを入れる。 ・ 勉強がしやすいように、部屋の温度や明るさを調節する。 	
社会的方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達と教え合ったり、問題を出し合ったりする。 ・ 友達といっしょに勉強する。 ・ 勉強のなやみを人に相談する。 	
外発的調整方略	
負担軽減方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 得意なところや好きなところを多く勉強する。 ・ 得意なところや簡単なところから勉強を始める。 ・ あきたら別の教科を勉強する。 ・ 勉強の合間に休けいを入れる。 ・ やる気が出るまで待って、気分が乗ったときに勉強する。 	
報酬方略	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 勉強が終わったり問題ができたなら、お菓子を食べる。 ・ 何かを食べたり飲んだりしながら勉強する。 ・ 「勉強が終わった後、遊べる」と考えて勉強する。 ・ 勉強やテストがよくできたら、親からごほうびをもらう。 	

また、伊藤(2000)は、小学校第5学年を対象に、計算の宿題場面(6日間)を通して、動機づけの側面の自己調整学習方略の獲得を促す働きかけを次のように行ったと述べている。「3つの自己動機づけ方略の説明を行い、そのうち1つを自己選択してもらった。その際、使ったことがなく、もっとも実行できそうな方略を選んでもらうことにした。2日間にわたり、宿題に取り組む中で利用するように教示し、3日目は、自由に組みんでよいことを伝えた。」¹¹⁾

これらのことから、本研究では、自己調整学習方略を適用する際に、次の3点に留意することとする。

- ① 認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略を一つずつ選び、同時に活用させる。
- ② これまで使ったことがなく、最も実行できそうな方略を選ぶようにする。
- ③ 1時間目で選んだ自己調整学習方略を2時間目まで活用し、3時間目からは自由に選ぶようにする。

以上を基に、本研究では、自己調整学習方略を授業で適用できるように、「自己調整学習方略ガイド」を開発し、活用の際に働きかけを行うこととする。

2 研究仮説の設定及び検証の視点

(1) 研究仮説

小学校国語科第5学年「読むこと」の授業において、「自己調整学習方略ガイド」を開発し、その活用を通じた学習指導を行えば、児童の自己効力感が高まるであろう。

(2) 検証の視点と分析内容

検証の視点と方法については、表2に示す。

表2 研究の視点と検証の方法

	検証の視点	検証の方法
1	国語科「読むこと」の授業における自己効力感が高まったか。	・ アンケート(自己効力感尺度)の分析
2	「自己調整学習方略ガイド」を開発したことは、国語科「読むこと」における自己効力感を高めることに有効だったか。	・ 「自己調整学習方略ガイド」の分析 ・ 振り返りシートの記述分析

3 検証授業の計画と実施

自己調整学習方略を授業場面で適用して検証するため、指導事項及び単元構成を同様にした2単元を設定し、比較・検証を行う。

(1) 第1回検証授業(9月単元 全10時間)

ア 期間

平成28年9月20日～10月6日

イ 対象

小学校 第5学年 34名

ウ 内容

指導事項：読むこと エ

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

単元名：物語のよさをポップで解説しよう～ここがいいね！物語の「おもしろさのひみつ」～

教材文：「注文の多い料理店」(東京書籍)5年「真っ赤ずきんちゃん」自作教材

言語活動：物語をおもしろくしている工夫についての解説文をポップ(広告カード)に書くこと。(2)エ

エ 単元計画

検証授業の単元計画は表3のとおりである。

表3 9月単元計画(全10時間)

次時	学習活動	評価		評価規準	評価方法
		規	準		
1	○ 事前アンケートを行う。 ○ 単元の見直しをもつ。 ○ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」の使い方を知る。	○		・ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って、「おもしろさのひみつ」を見付けるために本や文章を読もうとしている。	事前アンケート 振り返りシート
2	○ 自作教材「真っ赤ずきんちゃん」を、「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って読み、使い方を理解する。	○		・ 自作教材「真っ赤ずきんちゃん」を読み、「おもしろさのひみつ」を見付けながら、「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使った学習の進め方を理解することができる。	振り返りシート ポップ(広告カード)
3 4 5	○ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って、教科書教材「注文の多い料理店」の文章から、おもしろいと思った表現の工夫や物語の仕掛けを見付け、自分の考えをポップにまとめる。	○	○	・ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って、「注文の多い料理店」のおもしろいと思った表現の工夫や物語の仕掛けを捉え、自分が考えたことをポップにまとめることができる。	振り返りシート ポップ(広告カード)
6	○ 自分のおすすめのポップと、自分が「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」で選んで使った自己調整学習方略について紹介し合う。 ○ 中間アンケートを行う。	○		・ 自分がまとめた「おもしろさのひみつ」を紹介することができる。 ・ 友達が進んで使った自己調整学習方略の良さに気付いたり、自分の学習の進め方を振り返ったりして、さらに本や文章を読もうとしている。	振り返りシート ポップ(広告カード) 中間アンケート
7 8	○ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って、宮沢賢治の作品をおもしろいと思った表現の工夫や物語の仕掛けを見付け、自分の考えをポップにまとめる。	○	○	・ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って、宮沢賢治の作品のおもしろいと思った表現の工夫や物語の仕掛けを捉え、自分が考えたことをポップにまとめることができる。	振り返りシート ポップ(広告カード)
9	○ 「おもしろさのひみつ」についてまとめたポップと、自分が「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」で選んで使った自己調整学習方略について紹介し合う。	○		・ 自分がポップにまとめた「おもしろさのひみつ」を紹介することができる。 ・ 友達が進んで使った自己調整学習方略の良さに気付いたり、自分の学習の進め方を振り返ったりして、さらに本や文章を読もうとしている。	振り返りシート
10	○ 学習の振り返り ○ 事後アンケートを行う。	○		・ これまでの学習を振り返り、宮沢賢治の作品の「おもしろさのひみつ」について読み取り、ポップにまとめたこと、「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を活用して自己調整学習方略を選んで活用し、学習したことについて、自分の言葉でまとめている。	振り返りシート 事後アンケート

(2) 第2回検証授業 (11月単元 全8時間)

ア 期間

平成28年11月25日～12月16日

イ 対象

小学校 第5学年 34名

ウ 内容

指導事項：読むこと エ

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

単元名：劇的！表現の匠・椋鳩十の「匠の技」をさぐろう

教材文：「大造じいさんとがん」(東京書籍)5年

言語活動：優れた叙述を見付け、優れていると考えた理由を『匠の技』ブックにまとめること。(2)エ

エ 単元計画

検証授業の単元計画は表4のとおりである。

(3) 指導方法の工夫

ア 「自己調整学習方略ガイド」の開発

伊藤・神藤(2003)の自己調整学習方略と下位尺度を整理した2頁表1を基に、「自己調整学習方略ガイド」(児童には「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」と提示する。)を作成した(5

頁図1)。

表5に示す「自己調整学習方略の整理」と「自己調整学習方略ガイド」の関連を基に、作成上の留意点を次に述べる。

表4 11月単元計画 (全8時間)

次時	学習活動	評語	評価規準	評価方法
1	○ 作者や作品の紹介を聞く。 ○ 教科書教材「大造じいさんとがん」の挿絵に合うようにお話を考えて書き、椋鳩十の叙述と比較する。 ○ 単元の学習課題を設定する。 ○ 事前アンケートを行う。	○	・ 教科書教材「大造じいさんとがん」の挿絵に合せて書いた自分の叙述と椋鳩十の叙述を比較し、自分には思いつかなかった描写や工夫している表現を見付けようとしている。	事前アンケート 振り返りシート
2	○ 学習計画を立てる。 ○ 教科書教材「大造じいさんとがん」の文章を読み、「匠の技」(優れた叙述)を見付け、それらが優れていると考えた理由を「匠の技」カードにまとめる。	○	・ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って「大造じいさんとがん」を読み、優れた叙述(情景描写、擬声語、擬態語など)をとらえ、優れていると考えた理由を「匠の技」カードにまとめることができる。	振り返りシート 「匠の技」カード
3	○ 友達と「匠の技」カードを読み合い、自分の「匠の技」カードを修正したり、新たにカードをまとめる。	○	・ 友達と「匠の技」カードを読み合い、優れた叙述(情景描写、擬声語、擬態語など)が暗示的に表している登場人物の心情に気付く、優れている理由について「匠の技」カードにまとめることができる。	振り返りシート 「匠の技」カード
4	○ 教科書教材「大造じいさんとがん」の文章を読み、「匠の技」(優れた叙述)についてまとめた「匠の技」ブックを作る。 ○ 自分が「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」で選んで使った自己調整学習方略について話し合う。 ○ 中間アンケートを行う。	○	・ 学習のめあてを達成するために役立った(役立たなかった)方法とその理由について考えたことを基に、学習の進め方の改善点に気付いている。	振り返りシート 中間アンケート
5	○ 並行読書で選んだ椋鳩十作品を読み、「匠の技」(優れた叙述)とその理由について、「匠の技」ブックにまとめる。	○	・ 「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を使って椋鳩十作品を読み、優れた叙述(情景描写、擬声語、擬態語など)をとらえ、優れていると考えた理由をカードにまとめることができる。	振り返りシート 「匠の技」カード
6	○ 椋鳩十作品についてまとめた「匠の技」ブックを読み合い、読んでみたかった作品を読んだり、自分が見つけた「匠の技」(優れた叙述と優れていると考えた理由)を「匠の技」カードにまとめる。	○	・ 友達がまとめた「匠の技」ブックを読み、読んでみたいと思った作品を読んだり、作品を読んで見つけた優れた叙述と優れていると考えた理由を「匠の技」カードにまとめる。	振り返りシート 「匠の技」カード
7	○ 学習の振り返り ○ 事後アンケートを行う。	○	・ これまでの学習を振り返り、「ほっふ、ステップ、JUMP!ガイド」を活用して役立ったことや改善したいことについてまとめている。	振り返りシート 事後アンケート

表5 「自己調整学習方略の整理」と「自己調整学習方略ガイド」の関連

自己調整学習方略の整理 (2頁, 表1)		「自己調整学習方略ガイド」(5頁, 図1)				
認知的側面の自己調整学習方略		読むときにやってみよう!				
方略	下位尺度	方略名	内容			
認知的側面との自己相関	高	おすすめ度	高	置きかえ	むずかしい言葉を、自分が分かる言葉や、知っている言葉に置きかえてみる。	
	一般的認知 (理解・想起) 方略			勉強をするとき、大事なむずかしい言葉を、自分の言葉におきかえた。	まとめ	理解できるように、読んだことの要点をまとめてみる。
	復習・まとめ方略			理解できるように、それぞれ習ったことの要点をまとめた。	関係づけ	新しい課題をするときに、前回学んだことや、できたこと、分かったことを使ってみる。
	関係づけ方略			新しい課題をするのに、以前に学んだことを生かした。	くり返し	読んでいるとき、一度、中断して、読んだことをくり返してみる。
リハーサル方略	読んでいるとき、一度、中断して、読んだことをくりかえしてみた。	低	低			
動機づけの側面の自己調整学習方略		学習の進め方を工夫しよう!				
方略	下位尺度	方略名	内容			
内発的調整方略との相関	高	おすすめ度	高	想像	前の学習でうまくいったことを思い出す。	
	想像方略			前にテストなどでうまくいったことを思い出す。	知識・興味	自分のよく知っていることや興味のあることと結びつけて学習する。
	内容方略			自分のよく知っていることや興味のあることと関係づけて勉強する。	めりはり	「ここまではやるぞ」と読む量や時間を決めて学習する。
	めりはり方略			「ここまではやるぞ」と、量と時間を決めて勉強する。	整理	色えん筆を使って、ノートに書いたり、教科書に書きこみをする。
	整理方略			色のついたペンを使って、ノートをとったり、教科書に書きこみをする。	交流	友達と教え合ったり、友達に説明してアドバイスをもらったりする。
社会的方略	友達と教え合ったり、問題を出し合ったりする。	得意・かん単	得意なところや、できそうなところから始める。			
低	低	低	低			
外発的調整方略との相関	高	おすすめ度	高	サイン	よくできたら、先生に見てもらい、サイン(はんこ、シールなど)をもらう。	
	負担軽減方略			得意なところや簡単なところから勉強を始める。	サイン	よくできたら、先生に見てもらい、サイン(はんこ、シールなど)をもらう。
報酬方略	勉強やテストがよくできたら、親からごほうびをもらう。	低	低			

まず、認知的側面の自己調整学習方略を「読むときにやってみよう!」、動機づけの側面の自己調整学習方略を「学習の進め方を工夫しよう!」と示した(4頁表5中の¹)。次に、認知的側面の自己調整学習方略及び動機づけの側面の自己調整学習方略と相関が高い順に「おすすめ度」を示し、児童が選ぶ際に参考にできるようにした(4頁表5中の²)。各自己調整学習方略の名称(4頁表5中の³)は、児童が理解しやすいように変更した。さらに、各自己調整学習方略の下位尺度から、国語科「読むこと」の授業で児童が活用しやすいと思われるものを一つずつ選び、理解しやすいように修正した(4頁表5中の⁴)。

また、伊藤(2000, 2009)が示した自己調整学習方略の獲得を促す働きかけを基に、自己調整学習方略の選び方・使い方を示した(図1)。授業で活用する際、児童の自己調整学習方略の活

用状況を把握するため、「選んで使った日」を記入できるように欄を設けた(図1)。

作成した「自己調整学習方略ガイド」(図1)を9月単元で活用後、児童の自己調整学習方略の選択・活用状況を分析したことを基に修正を加え、11月単元で活用した(7頁図5)。修正点については、「4 検証授業の分析と考察」で詳しく述べる。

イ 「自己調整学習方略ガイド」の活用

(7) 自己調整学習方略を選択し、活用すること

第1回検証授業(9月単元)第1時では、「自己調整学習方略ガイド」の使い方を説明した。使い方は、3頁で述べた活用上の留意点3点に準じ、第2時、第3時では選んだ自己調整学習方略を続けて使い、第4時からは、自由に選んでよいことを確認した。ただし、認知的側面の自己調整学習方略と動機づけの側面の自己調整学習方略を一つずつ選ぶよう、指示した。

JUMP! ガイド

ステップ、ほっぷ、

ほっぷ、ステップ、JUMP! ガイドは、学習の進め方を学び、自分で学習する力を付けるためのヒントです。学習の終わりに、自分で選んだ方法についてふり返り、次の学習に生かしていきましょう。

めざせ、「ほっぷ、ステップ、JUMP!」

- ① 「学習の進め方」と「読むとき」から、ひとつずつ、選んで使しましょう。
- ② 一番うまくいきそうな方法を選びましょう。
- ③ これまで使ったことがないものも選んでみましょう。
- ④ 初めの2時間は、続けて同じものを使います。3時間目からは、自由に選びましょう。

おすすめ度	★★★★★	★★★★	★★★	★★	★		
学習の進め方を工夫しよう!	想像 前の学習でうまくいったことを思い出す。	知識・興味 自分のよく知っていることや興味のあることと結びつけて学習する。	めりはり 「ここまではやるぞ」と読む量や時間を決めて学習する。	整理 色えん筆を使って、ノートに書いたり、教科書に書きこみをしたりする。	交流 友達と教え合ったり、友達に説明してアドバイスをもらったりする。	得意・かん単 得意なところや、できそうなところから始める。	サイン よくできたら、先生に見てもらい、サイン(はんこ、シールなど)をもらう。
選んで使おう!	選んだ日	選んだ日	選んだ日	選んだ日	選んだ日		

おすすめ度	★★★★★	★★★★	★★★	★★
読むときにやってみよう!	置きかえ むずかしい言葉を、自分が分かる言葉や、知っている言葉に置きかえてみる。	まとめ 理解できるように、読んだことの要点をまとめてみる。	関係づけ 新しい課題をするときに、前回学んだことや、できたこと、分かったことを使ってみる。	くり返し 読んでいるとき、一度、中断して、読んだことをくり返してみる。
選んで使おう!	選んだ日	選んだ日	選んだ日	選んだ日

図1 「自己調整学習方略ガイド」(9月単元で活用)

(4) 自己調整学習方略を選択・活用して学習したことについて振り返ること

毎時間の授業終末5分間で、本時の学習で分かったこととともに、自分が選んだ自己調整学習方略の活用の仕方について振り返るようにした。振り返ったことを、第二次と第三次の最後の時間に友達と交流する時間を設定した。

4 検証授業の分析と考察

(1) 第1回検証授業（9月単元）の分析と考察
ア 国語科「読むこと」の授業における自己効力感が高まったか

児童の自己効力感を測るために、検証授業の事前・中間・事後でアンケートを行った。アンケートで用いた自己効力感尺度¹²⁾を表6に示す。表7に示す通りt検定の結果、自己効力感の平均値には、事前と中間において有意な上昇が見られた。中間と事後については、有意差は見られなかった。

以上のことから、自己効力感、教科書教材を活用した学習を終えた段階で高まり、単元終了後まで持続したことが示された。

表6 自己効力感尺度

・ 勉強がしっかりできると思う。
・ 勉強していく自信がある。
・ これから先、勉強が得意であると思う。
・ 勉強で、いい成績をとれるだろうと思う。

*「まったくあてはまらない」～「とてもよくあてはまる」の4件法

表7 自己効力感 事前・中間・事後の比較

	平均値	t値
事前 (第一次第1時)	10.3	*1.81
中間 (第二次第6時)	10.9	
事後 (第三次第10時)	10.7	-0.89

* p<.05

イ 「自己調整学習方略ガイド」を開発したことは、国語科「読むこと」の授業における自己効力感を高めることに有効だったか

(7) 自己調整学習方略を選択・活用した理由や改善策の記述から

第三次第10時では、「自己調整学習方略ガイド」の活用について、34名中33名の児童が役立ったことについて記述していた。第二次第5時（振り返りの視点を明示しなかった）までの振り返りシートの記述では、自己調整学習方略の選択・活用に関する理由や改善策を述べた平均回数が、自己効力感が高まった児童の方が多かった（表8）。記述の変容を図2、3、4に示す。

表8 理由や改善策を記述した回数の平均（第1時から第5時まで）

	自己効力感高まった群(16名)	自己効力感下がった群(9名)
平均回数(回)	2.2	1.2

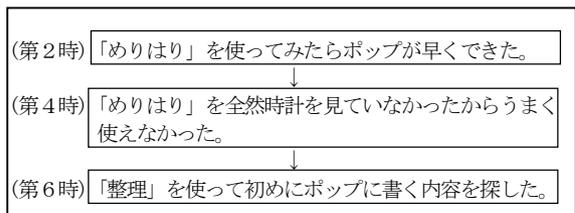


図2 自己効力感が最も高まったA児の振り返りの変容

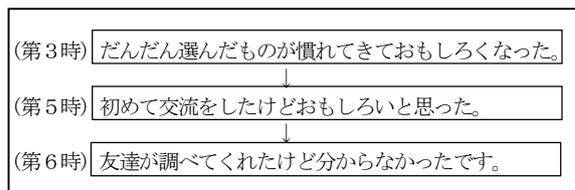


図3 自己効力感が下がったB児の振り返りの変容

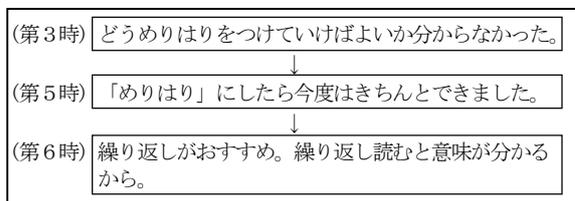


図4 自己効力感が最も下がったC児の振り返りの変容

これらのことから、児童は、「自己調整学習ガイド」を使って、学習課題の達成に向けて「読むこと」の学習を進めたと考えられる。さらに、児童の自己効力感を高めるためには、自己調整

学習方略について振り返る際の視点を明確に示し、役立たなかった場合に修正できるようにする必要がありますことが示唆された。振り返りシートを修正し、第2回検証授業（11月単元）を行うこととする。

(イ) 自己調整学習方略を選択・活用した人数・回数から

自己効力感が高まった児童は、表9に示すように、「交流」「整理」「繰り返し」「まとめ」を選択・活用した人数・回数が多かった。しかし、

表9 自己効力感の高まりと活用した自己調整学習方略との関連（9月単元）

	方略選択、使用が多かった順											
	動機づけの側面の自己調整学習方略								認知的側面の自己調整学習方略			
	内発的動機づけ方略				外発的動機づけ方略							
先行研究（中学生） （各動機づけと相関が高い順）	想像	知識・興味	めりはり	整理	交流	得意・簡単	サイン	置き換え	まとめ	関係付け	繰り返し	
高まった群（16名） +5～+1	交流	整理	知識・興味	めりはり	想像	得意・簡単	サイン	繰り返し	まとめ	置き換え	関係付け	
使った人数	16	6	5	3	1	2	0	10	10	9	4	
使った回数	50	12	10	7	2	3	0	29	24	16	7	
変化なし群（9名） 0	交流	知識・興味	めりはり	想像	整理	得意・簡単	サイン	繰り返し	置き換え	関係付け	まとめ	
使った人数	7	3	2	1	1	5	3	7	5	4	2	
使った回数	19	6	5	1	3	8	6	20	10	8	4	
下がった群（9名） -1～-7	交流	めりはり	知識・興味	想像	整理	得意・簡単	サイン	繰り返し	置き換え	まとめ	関係付け	
使った人数	6	4	3	3	1	5	2	6	5	5	3	
使った回数	11	9	6	4	1	10	8	18	14	9	8	

ステップ、JUMP! ガイド

ほっぶ、

ほっぶ、ステップ、JUMP! ガイドは、学習の進め方を学び、自分で学習する力を付けるためのヒントです。学習の終わりに、自分で選んだ方法についてふり振り返り、次の学習に生かしていきましょう。

めざせ、「ほっぶ、ステップ、JUMP!」

① 「学習の進め方」と「読むとき」から、ひとつずつ、選んで使しましょう。

② 一番うまくいきそうな方法を選びましょう。

③ これまで使ったことがないものも選んでみましょう。

④ 初めの2時間は、続けて同じものを使います。3時間目からは、自由に選びましょう。

おすすめ度	★★★★★	★★★★	★★★	★★	★		
学習の進め方を工夫しよう!	整理 色えん筆を使って、ノートに書いたり、教科書に書きこみをする。	知識・興味 自分のよく知っていることや興味のあることと結びつけて学習する。	想像 前の学習でうまくいったことを思い出す。	めりはり 「ここまではやるぞ」と読む量や時間を決めて学習する。	交流 友達と教え合ったり、友達に説明してアドバイスをもらったりする。	サイン よくできたら、先生に見てもらい、サイン（はっこ、シールなど）をもらう。	得意・かん単 得意なところや、できそうなところから始める。
ひとつずつ選んで使おう!	選んだ						
	使った						

おすすめ度	★★★★★	★★★★	★★★	★★
やつ読むときに!	置き換え むずかしい言葉を、自分が分かる言葉や、知っている言葉に置きかえてみる。	まとめ 理解できるように、読んだことの要点をまとめてみる。	関係づけ 新しい課題をするときに、前回学んだことや、できたこと、分かったことを使ってみる。	くり返し 読んでいるとき、一度、中断して、読んだことをくり返してみる。
ひとつずつ選んで使おう!	選んだ			
	使った			

図5 「自己調整学習方略ガイド」（11月単元で活用）

「交流」「繰り返し」については、自己効力感が高まらなかった児童の選択・活用も最も多かった。「まとめ」については、自己効力感が高まった児童が選択・活用した人数を見ると、「繰り返し」「置き換え」とほぼ同じであった。

以上のことから、自己効力感が高まった児童の使用傾向を基に、「自己調整学習方略ガイド」の「おすすめ度」を修正する必要があることが示唆された。そこで、7頁表9を基に修正した（7頁図5）。「整理」は、自己効力感が高まった児童のみ、多く選択・活用していたため、「おすすめ度」を変更した。ただし、「交流」「繰り返し」「まとめ」については、「おすすめ度」を変更せずに活用し、11月単元で引き続き検証する。

(ウ) 自己調整学習方略を選択・活用した推移と活用の様子から

自己効力感が高まった児童が多く選択・活用した「交流」「整理」「繰り返し」「まとめ」のうち、自己効力感が高まらなかった児童も、高まった児童と同様に6割以上が選択・活用していた「交流」「繰り返し」「まとめ」について、児童がどのように活用していたかを分析した。

a 動機づけ的側面の自己調整学習方略

7頁表9に示すように、34名中29名の児童が「交流」を選んで使っていた。図6に示すように、自己効力感が高まった児童も下がった児童も、第二次第4時で「交流」の選択・活用が増えた。第3時は「表現の工夫を見付ける」、第4時は「表現の工夫について自分の考えをまとめる」という学習課題であった。

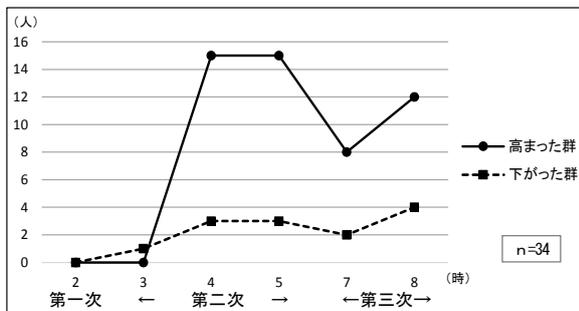


図6 「交流」の選択・活用の推移

第4時で「交流」を選択・活用した児童の振り返りシートの記述を図7に示す。

- ・ 分からなかった所が交流して分かるようになりました。
- ・ 「痛快」の意味が分からなかった時、〇〇君が辞書を引いて教えてくれました。
- ・ とりのりの人のポップを見て、新しいアイデアが出たので良かったです。
- ・ 交流すると、友達がどうやって書いているのかが分かるし、それを見て自分が書く時にヒントになるから良かったです。

分からない時・ヒントを得たい時に選んで使っていた。

図7 第4時「交流」についての振り返り

しかし、図8に示すように、「交流」が役立たなかったことについて記述している児童もいた。

- ▲ 本を読むだけで時間になってしまい、ポップを書くのに必死で交流できなかった時もあった。
- ▲ 友達と違う本を読んでいたら交流が使えなくて困った。

学習内容に適していなかった。

- ▲ どちらかと言うと、交流ではなく、得意・簡単でやってうまくいった。

他の方法が役立った。

図8 第10時「交流」についての振り返り

第二次第4時は、第3時と比較すると、学習内容の難易度が上がったため、多くの児童が「交流」を選んだと推察される。また、「交流」が役立たない時があることに気付いた児童もいたことが分かった。

以上のことから、「交流」の活用の際に支援する必要があると推察されるので、11月単元では、学習内容に適した自己調整学習方略を選択できるように促す。学習内容の難易度が上がる第二次第3時では、全員が交流する時間を教師が意図的に設定し、自己調整学習方略の選択・活用の推移を引き続き検証する。

b 認知的側面の自己調整学習方略

「繰り返し」と「まとめ」は、自己効力感が高まった児童、下がった児童共に、約6割が選択・活用していた（表10）。

表10 「繰り返し」「まとめ」を選択・活用した人数

	繰り返し	まとめ
自己効力感高まった群(16名)	10人	10人
自己効力感下がった群(9名)	6人	5人

「繰り返し」「まとめ」の選択・活用の推移(図9, 10)を見ると, 第二次第4時と第5時(教科書教材を活用した学習の最後)では, 自己効力感が高まった児童は, 「繰り返し」と「まとめ」を選択・活用していた。自己効力感が下がった児童は, 第4時では「まとめ」, 第5時では「繰り返し」を選択・活用していた。自己効力感が高まった児童の記述を図11に示す。

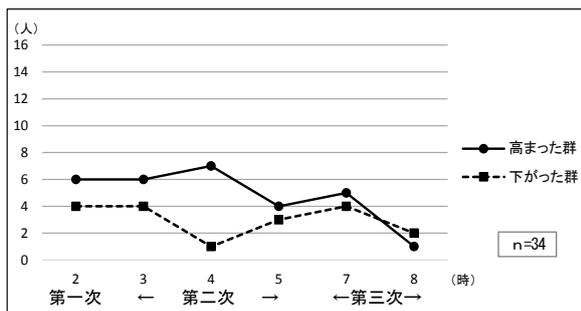


図9 「繰り返し」の選択・活用の推移

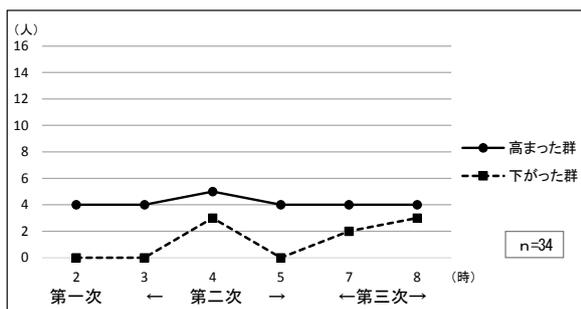


図10 「まとめ」の選択・活用の推移

<自己効力感が高まった児童の振り返りシートの記述 第5時>
 「繰り返し」について
 ・ 読んでいる時中断して読んだら, 物語のおもしろさがたくさん出てきた。
 「まとめ」について
 ・ 「まとめ」を選んでみると, ポップがいつもとちがった形で書けた。

図11 第5時「繰り返し」「まとめ」についての振り返り

自己効力感が高まった児童と自己効力感が下がった児童の「繰り返し」「まとめ」の選択・活用の仕方に, 違いがあることが推察される。自己効力感が高まった児童は, 「繰り返し」「まとめ」を使って学習課題を達成できたと捉えていることがうかがえた。

そこで, 11月単元における児童の「繰り返し」「まとめ」の選択・活用の推移を引き続き検証

する。

以上述べたことから, 自己効力感が高まった児童の「自己調整学習方略ガイド」の活用を基に, 第2回検証授業(11月単元)において, 以下の4点について修正・改善し, 引き続き検証を行う。

- ① 振り返りシートを修正し, 振り返りの視点を明確にする。
- ② 「自己調整学習方略ガイド」の「おすすめ度」を修正する。
- ③ 「自己調整学習方略ガイド」に「選んだ日」「使った日」を分けて記入できるようにする。
- ④ 学習内容に適した自己調整学習方略を選択するように促したり, 学習内容の難易度に応じて, 意図的に交流する時間を設定したりする。

(2) 第2回検証授業(11月単元)の分析と考察 ア 国語科「読むこと」の授業における自己効力感が高まったか

9月単元事後及び11月単元における事前・中間・事後の自己効力感を比較した。自己効力感の平均値については, 9月単元事後と11月単元事前, 11月単元事前と中間, 及び事後において, 有意差は見られなかった(表11)。自己効力感は, 9月単元事後から11月単元事後まで, 持続したと推察される。

表11 自己効力感 9月単元事後及び11月単元における事前・中間・事後の比較

	平均値	t値
9月単元事後 (第三次第8時)	10.7	-0.43
11月単元事前 (第一次第1時)	10.6	
中間 (第二次第4時)	10.5	-0.33
事後 (第三次第8時)	10.8	

* p<. 05

イ 「自己調整学習方略ガイド」を開発したことは, 国語科「読むこと」の授業における自己効力感を高めることに有効だったか

(7) 自己調整学習方略を選択・活用した理由や

改善策の記述から

第三次第8時では、「自己調整学習方略ガイド」の活用について、31名全員（34名中3名欠席）の児童が、役立ったことについて記述していた。その中で、「役立ったときも役立たなかったときもあった。」と記述していた児童が9名いた。9名全員が理由を述べており、6名は改善策について述べていた。自己効力感が高まった児童（9月単元では自己効力感が下がった児童）の記述の変容を図12,13に示す。

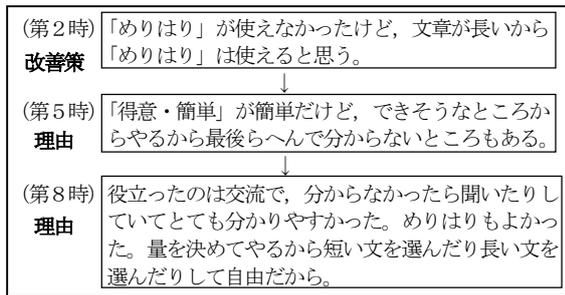


図12 自己効力感が高まったB児の振り返りの変容

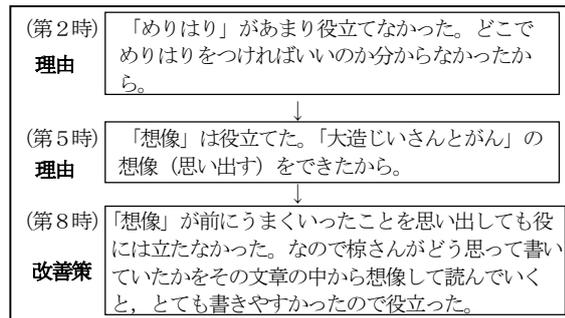


図13 自己効力感が最も高まったC児の振り返りの変容

以上のことから、振り返りシートを修正したことにより、児童は、自己調整学習方略について具体的に振り返ることができ、自己効力感も高まったことが示唆された。

(イ) 自己調整学習方略を選択・活用した人数・回数から

自己効力感が高まった児童は、表12に示すように、「交流」「めりはり」「繰り返し」「置き換え」を選択・活用した人数、回数が多かった。しかし、自己効力が高まらなかった児童も同様に多かった。また、9月単元で多かった「まとめ」について、自己効力が高まった児童が選択・活用した人数と回数を見ると、「繰り返し」「置き換え」の方が多かった。

これらのことから、自己効力感の高まりと自己調整学習方略の選択・活用の頻度については、特徴的な傾向は見られなかったと言える。「自己調整学習方略ガイド」(7頁図5)の「おすすめ度」を変更する必要はないと捉え、授業で活用できるものを開発できたと考える。

(ウ) 自己調整学習方略を選択・活用した推移と活用の様子から

9月単元に引き続き、「交流」「繰り返し」「まとめ」について、以下のように分析した。

a 動機づけ的側面の自己調整学習方略

34名中21名の児童が「交流」を選んで使っていた(表12)。「交流」の選択・活用は、自己効力が高まった児童も高まらなかった児童も、第二次第4時で増えた(図14)。

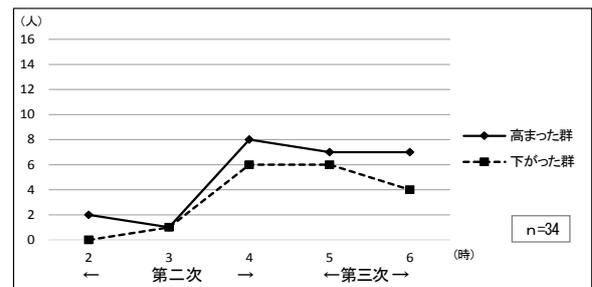


図14 「交流」の選択・活用の推移

表12 自己効力感の高まりと活用した自己調整学習方略との関連(11月単元)

	方略選択、使用が多かった順											
	動機づけ的側面の自己調整学習方略						認知的側面の自己調整学習方略					
	内発的動機づけ方略			外発的動機づけ方略			内発的動機づけ方略			認知的側面の自己調整学習方略		
先行研究(中学生) (各動機づけと相関が高い順)	想像	知識・興味	めりはり	整理	交流	得意・簡単	サイン	置き換え	まとめ	関係付け	繰り返し	
高まった群(14名) +5~+1	交流	めりはり	知識・興味	整理	想像	得意・簡単	サイン	繰り返し	置き換え	まとめ	関係付け	
使った人数	10	8	5	4	4	3	0	12	8	6	4	
使った回数	25	10	6	8	5	10	0	33	17	8	5	
変化なし群(9名) 0	交流	めりはり	想像	知識・興味	整理	得意・簡単	サイン	繰り返し	関係付け	まとめ	置き換え	
使った人数	5	5	4	3	2	4	0	9	6	3	3	
使った回数	15	9	5	3	3	10	0	27	10	3	3	
下がった群(11名) -1~-2	交流	知識・興味	想像	めりはり	整理	得意・簡単	サイン	置き換え	繰り返し	関係付け	まとめ	
使った人数	6	4	4	3	2	2	0	7	5	5	4	
使った回数	17	6	4	7	2	4	0	19	12	8	7	

第4時で「交流」を選択・活用した児童の振り返りシートの記事を見ると、9月単元と同様の理由で「交流」を選んでいた(図15)。

・自分が聞き取れなくて分からなかったところも、友達に聞いて次に進めたり、協力して教え合ったりできたのでよかったです。
 ・私は交流が良かったです。難しいことなど友達に聞いて分かることがあったからです。
 ・交流を使ってみたら、アドバイスしたり見合ったりしてよかったです。
 分からない時・ヒントを得たい時に選んで使っていた。

図15 第4時「交流」についての振り返り

第3時で全員が交流する時間を教師が意図的に設定したり、単元を通して「交流」の使い方を考えさせたりしたが、9月単元同様、「交流」の選択・活用が最も多く、理由も同様であった。「交流」は、分からない時や困った時、不安な時に選んでおり、学習内容に適しているかどうかを考えて選択・活用できていなかったことがうかがえた。

b 認知的側面の自己調整学習方略

9月単元において、自己効力感の高まりと選択・活用の傾向との関連が推察された「繰り返し」「まとめ」について分析した結果を以下に述べる。

表13に示すように、自己効力感が高まった児童は、9月単元同様に「繰り返し」を多く選択・活用していたが、「まとめ」の選択・活用は減った。

表13 「繰り返し」「まとめ」を選択・活用した人数(自己効力感高まった群)

		繰り返し	まとめ
自己効力感高まった群	9月(16人)	10人	10人
	11月(14人)	12人	6人↓

「繰り返し」「まとめ」の選択・活用の推移を見ると、図16、17に示すように、自己効力感が高まった児童は、第二次第4時(教科書教材を活用した学習の最後)では「繰り返し」の選択・活用が減り、「まとめ」が増えた。さらに、第三次で「繰り返し」の選択・活用が増え、「まとめ」は減った。

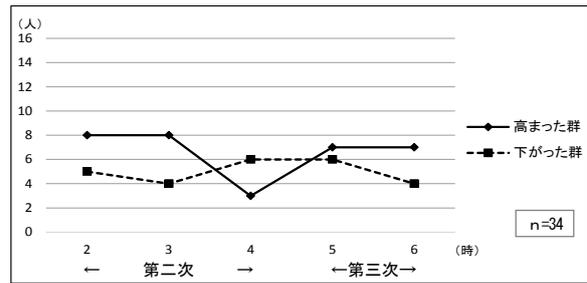


図16 「繰り返し」の選択・活用の推移

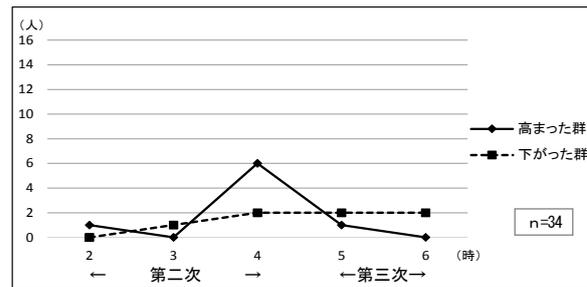


図17 「まとめ」の選択・活用の推移

一方、表14に示すように、自己効力感が下がった児童が「繰り返し」「まとめ」を選択・活用した人数には大きな変化は見られなかった。

表14 「繰り返し」「まとめ」を選択・活用した人数(自己効力感下がった群)

		繰り返し	まとめ
自己効力感下がった群	9月(9人)	6人	5人
	11月(11人)	5人	4人

「繰り返し」「まとめ」の選択・活用の推移についても、図16、17に示すように、第二次、第三次を通して、大きな変化は見られなかった。

単元の最後(第三次第8時)に自己調整学習方略について振り返った際に、「繰り返し」「まとめ」について述べていた児童の記事を図18に示す。

・「繰り返し」は頭に入ってこなかったら、また読み返すというだけでよかったので、いつでも使えた。
 ・繰り返し読むことで、心情が探れていった。
 ・共通点を見付ける時は、「繰り返し」とか「まとめ」がいいと思った。
 どのような時に役立つかを考えている。

図18 第8時「繰り返し」「まとめ」についての振り返り

以上のことから、自己効力感が高まった児童は、学習の進み方に合わせて「繰り返し」「まとめ」を選択・活用していたことがうかがえた。

また、「読むこと」の授業の中で、「繰り返し」「まとめ」がどのような時に役立つか気付いた児童もいたことが分かった。

(3) 総合考察

第1回検証授業（9月単元）及び第2回検証授業（11月単元）の分析と考察から総合的に考察したことを以下に述べる。

ア 国語科「読むこと」の授業における自己効力感が高まったか

自己効力感は、9月単元で教科書教材を活用した学習を終えた段階で高まり、11月単元終了後まで持続したことが示された。

イ 「自己調整学習方略ガイド」を開発したことは、国語科「読むこと」の授業における自己効力感を高めることに有効だったか

(ア) 自己調整学習方略を選択・活用した理由や改善策の記述から

児童が、自己調整学習方略を選択し、活用の仕方について具体的に振り返り、修正しながら学習することによって、自己効力感が高まることが示唆された。「交流」を、学習内容に合わせて選択・活用できていなかったにもかかわらず、自己効力感が高まった児童がいたことから、「自己調整学習方略ガイド」を活用し、振り返ることが重要だと考えられる。

(イ) 自己調整学習方略を選択・活用した人数・回数から

自己効力感の高まりと自己調整学習方略を選択・活用した頻度について検証し、「自己調整学習方略ガイド」の修正を行った。「自己調整学習方略ガイド」を開発し、小学校国語科第5学年「読むこと」の授業で活用できることを実証的に示すことができたと言える。

(ウ) 自己調整学習方略を選択・活用した推移から

学習内容に合わせて自己調整学習方略を選んで活用していた児童は、自己効力感が高まっていたことがうかがえた。このことから、以下に述べる2点の支援が考えられる。

① 「交流」を選択・活用していた児童は、学習内容に適した自己調整学習方略について

考える以前に、学習内容を難しいと感じた時や、どのように取り組めばよいか分からない時に選択・活用していたことがうかがえた。本時の学習に取り組む前に、児童が「できそうだ」と思っているかを確認することが必要である。

② 「繰り返し」は文章を読む時、「まとめ」はある程度読む活動が進んだ時に選択・活用を促すことが効果的であると推察される。学習内容とともに、自分の学習の進捗も考慮し、見通しをもって選択・活用できるようにすると、より効果的だと考えられる。

V 研究のまとめ

1 成果

(1) 「自己調整学習方略ガイド」を開発したことについて

児童が「自己調整学習方略ガイド」を活用して学習し、自己調整学習方略の選び方や使い方を振り返ることによって、児童の自己効力感が高まり、単元終了まで持続することが示唆された。さらに、「自己調整学習方略ガイド」を、小学校第5学年国語科「読むこと」の授業で活用することの有効性を示すことができた。

(2) 児童が「自己調整学習方略ガイド」を活用して学習する際に必要な教師の支援について

2単元を通して検証を行ったことにより、児童が「自己調整学習方略ガイド」を活用して学習する際に必要な教師の支援について整理することができた。その支援は、以下の2点である。

1点目は、振り返りの視点を明確にし、児童が選択した自己調整学習方略が役立たなかった場合に、次の学習ではどのように改善すればよいかを児童が考え、修正できるようにすることである。そのために、振り返りシートを修正したことは、有効であったと言える。

2点目は、児童が、学習内容に適した自己調整学習方略を選択できるようにすることである。文学的な文章を読む授業では、「繰り返し」と「まとめ」の選択・活用が有効であったことが示唆された。児童が学習内容に適した自己調整学習方略を選択できるように、教師は、児童が単元の学習を見通して、本時の学習内容を把握できるように、見通しをもたせることが必要である。

2 課題と今後の展望

(1) 国語科「読むこと」の授業における自己効力感が高まることについて

本研究では、国語科「読むこと」の授業における児童の自己効力感が高まり、単元終了まで持続することは示されたが、更に高まるということは示されなかった。第1回検証授業（9月単元）と比べて、第2回検証授業（11月単元）では、児童が自己調整学習方略を選択・活用して学習したことを具体的に振り返り、改善策を考えたり、学習内容に応じて自己調整学習方略を選択できるようになったりした様子が見られたことから、長期的に取り組んでいくことが必要であると考ええる。

動機づけの側面の自己調整学習方略では、「交流」の選択・活用が際立ったため、他の自己調整学習方略についての検証が十分できなかった。「交流」以外の自己調整学習方略と自己効力感を高めることの関連を検証することにより、新たな支援を見いだす必要がある。その支援によって、動機づけの側面の自己調整学習方略の選択・活用を更に促し、自己効力感が高まっていくと考える。

(2) 児童が学習内容に応じて適切な自己調整学習方略を選択することについて

本時の学習内容に適した自己調整学習方略を選択できていない児童への更なる支援が必要である。初期段階では、教師が児童と共に「自己調整学習方略ガイド」から、本時の学習内容に合う自己調整学習方略を絞り、その中から児

童が適切に選択できるようにする支援が必要であろう。そして、徐々に児童自身が、学習内容に合わせて適切に選択・活用できるように支援することが効果的であると考ええる。

引用文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」文部科学省，平成28年，49頁
- 2) 前掲書 1)，57頁
- 3) 前掲書 1)，58頁
- 4) 伊藤崇達「学びを支えているやる気」伊藤崇達編著『[改訂版]やる気を育む心理学』北樹出版，2007年，48頁
- 5) 前掲書 4)，48頁
- 6) 前掲書 4)，69頁
- 7) 伊藤崇達・神藤貴昭「自己効力感，不安，自己調整学習方略，学習の持続性に関する因果モデルの検証 認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して」『日本教育工学雑誌27』日本教育工学会，2003年，384，385頁
- 8) 伊藤崇達『自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割』北大路書房，2009年，76頁
- 9) 前掲書 8)，93頁
- 10) 前掲書 8)，119頁
- 11) 伊藤崇達「動機づけのタイプによる自己動機づけ方略訓練の効果」『日本教育心理学会総会発表論文集(42)』日本教育心理学会，2000年，493頁
- 12) 前掲書 7)，384頁

参考文献

伊藤崇達・神藤貴昭「自己効力感，不安，自己調整学習方略，学習の持続性に関する因果モデルの検証 認知的側面と動機づけの側面の自己調整学習方略に着目して」『日本教育工学雑誌27』日本教育工学会，2003年